

文部科学省・立命館大学 共同企画展

世界の歴史をはかる 年代ものさし展



立命館大学古気候学研究センターでは、福井県の水月湖をはじめ、世界各地の年縞を研究しています。

年縞とは、湖などの底に積もった地層がつくる特殊な縞模様のこと。1枚の層が1年に相当するため、この縞を数えればその年代を特定することが出来ます。また、縞の中には過去の気候変動や自然災害の履歴を知る重要な手がかりが入っています。

水月湖では好条件がいくつも重なり、世界でも類を見ないほどの年月にわたって年縞が形成され続けてきました。湖底から45mまでは、年縞の枚数がすべて数えられており、その数は約7万年分に及びます。

2012年には、水月湖年縞の枚数が地質年代の「標準ものさし」に採用され、2013年からは世界的に運用が始まりました。

今回の展示では、スタンドグラス状に加工した水月湖年縞の実物標本を展示すると同時に、古気候学研究センターの取り組みについてもご紹介します。



福井県年縞博物館での年縞標本展示



福井県水月湖

会期

2019年10月1日(火)

2019年11月8日(金)

開館時間

10:00 ~ 18:00

(入館時間は17:30まで。土曜・日曜・祝日は休館)

会場

文部科学省エントランス
(新庁舎2階入り口左側)

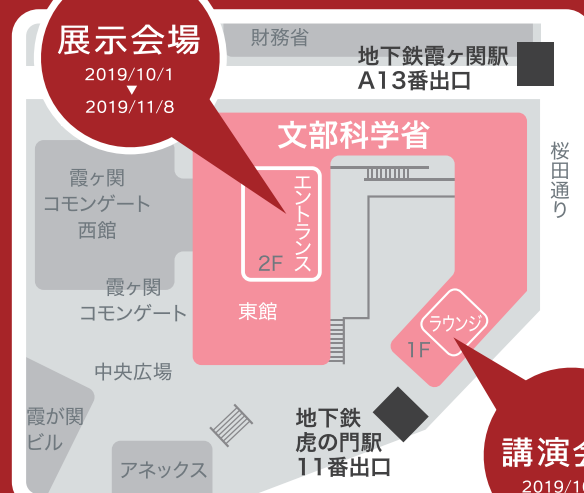
入館料

無料

展示会場

2019/10/1

2019/11/8



講演会場

2019/10/30

銀座線「虎ノ門駅」6・11番出口より直ぐ(11番出口より直結)
千代田線「霞ヶ関駅」A13番出口より徒歩5分
日比谷線「霞ヶ関駅」A8番・A13番出口より徒歩6分
丸ノ内線「霞ヶ関駅」A4番出口より徒歩8分

立命館大学 古気候学研究センター講演会

地質学のもっとも正確な時計



「歴史をはかるものさし」そして気候変動と文明の過去・現在・未来

立命館大学 古気候学研究センター長・中川毅教授と、副センター長・北場育子准教授が、最先端の年縞研究についてご紹介します。

水月湖の年縞が、世界の「標準ものさし」として認められるまでには、日本人を中心とする研究者たちの20年におよぶ努力がありました。また、マヤ文明の舞台であるユカタン半島から見つかった年縞には、近年の温暖化が持つ本当の意味について、きわめて重要な示唆が含まれていました。

年縞を通して見たとき、「現代」とはいつまで続くのか、古気候学研究センターの最新の研究成果を交えながらお話しします。

水月湖の年縞に刻まれた7万年の時間と「文明の時代」のはじまり



中川 毅
立命館大学 古気候学研究センターセンター長、教授

「文明の時代」はいつまで続くのか？ —マヤの年縞から見えてくる「予測不可能」な未来—



北場 育子
立命館大学 古気候学研究センター副センター長、准教授

日時

2019年10月30日(水)
17:30-19:30

会場

文部科学省 情報ひろばラウンジ
(旧文部省庁舎1階)

申込

事前申込み不要 ※当日会場受付

参加費

無料



講演会場
2019/10/30